


浦島太郎は光速玉手箱の煙にてアインシュタインを目撃したのか？

——認知症コミュニケーションにおける〈時間感覚の相対論〉について

オリジナルテキスト（岩波文庫「御伽草子」）	物語の梗概・用語等	コメント
<p style="text-align: center;">浦島太郎</p> <p>昔丹後国に、浦島といふもの侍りに、その子に浦島太郎と申して、年の齡二十四五の男有りけり。明け暮れ海のうろくづをとりにて、父母を養ひけるが、ある日のつれづれに、釣をせんとて出でにけり。浦々島々、入江々々、到らぬ所もなく、釣をし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしける所に、ゑしまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げける。浦島太郎此亀にいふやう、「汝、生有るものの中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきものなり。」</p> 	<p>浦島太郎：01</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>浦島太郎の出身・来歴</li> <li>浦島、亀を釣る</li> <li>浦島、釣った亀に言う</li> </ul>	<p>・物語の枠組</p>
<p>忽ちここに命をたたん事、いたはしければ、助くるなり。常には此恩を思ひ出すべし」とて、此亀をもとの海にかへしける。</p> <p>かくて浦島太郎、其日は暮れて帰りぬ。又次の日浦の方へ出でて、釣をせんと思ひ見れば、はるかかの海上に、小船一艘浮べり。怪しみやすらひ見れば、美しき女房只ひとり波にゆられて、次第に太郎が立ちたる所へ着きにけり。浦島太郎が申しけるは、「御身いかなる人にてましますば、かかる恐ろしき海上に、ただ一人乗りて御入り候やらん」と申しければ、女房いひけるは、「さればさる方へ便船申して候へば、折ふし浪風荒くして、人あまた海の中へはね入れられしを、心ある人</p> 	<p>02</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>亀を海に再度放つ浦島</li> <li>浦島、亀に救命の恩を売る</li> <li>浦島、海岸で釣りをする</li> <li>美しき、女房が接近する</li> <li>浦島、訝しながら女房に質す</li> <li>女房、浦島に来歴を話す</li> </ul>	

<p>有りて、自らをば此はし舟に乗せて放されけり。悲しく思ひ鬼の島へや行かんと、行方知らぬ折ふし、ただ今人に逢ひ参らせさぶらふ。此世ならぬ御縁にてこそ候へ。されば虎狼も、人を縁とこそしさぶらへ」とて、さめくと泣きにけり。浦島太郎も、さすが岩木にあらざれば、あはれと思ひ、綱を取りて引き寄せにけり。さて女房申しけるは、「あはれわれらを本国へ送らせ給ひてたび候へかし。これにて捨てられ参らせば、わらはは何処へ何となりさぶらふべき。捨て給ひ候はば、海上にての物思ひも、同じ事にてこそ候はめ」と、かきくどきさめくと泣きければ、浦島太郎もあはれと思ひ、同じ船に乗り、沖の方へ漕ぎ出す。かの女房の教へに従ひて、はるか十日余りの船路を送り、故郷へぞ着きにける。</p> <p>さて船より上り、いかなる所やらんと思へば、銀の築地をつきて、金の豊をならべ、門をたて、いかならん天上の住居も、これにはいかで勝るべき。此女房のすみ所、ことばにも及ばれず、中々申すもおろかなり。さて女房の申しけるは、「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、皆これ他生の縁ぞかし。ましてや遙かの波路を、はるくと送らせ給ふ事、ひとへに他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、</p>	<p>03</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・女房、海上にて遭難の縁を話す</li> <li>・浦島、女房の舟にて十日の旅をする</li> <li>・女房の故郷にもどる／到着す</li> <li>・女房の故郷は楽園なり</li> </ul>	
--	---	--

 <p>わらはと夫婦の契をもなし給ひて、同じ所に明し暮し候はんや」と、こまごまと語りける。浦島太郎申しけるは、「ともかくも仰せに従ふべし」とぞ申しける。さて借老同穴の語らひも浅からず。天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、互に鴛鴦の契浅からずして、明し暮させ給ふ。</p> <p>さて女房申しけるは、「これは竜宮城と申す所なり、此所に四方に四季の草木をあらはせり。入らせ給へ、見せ申さん」とて、引具して出でにけり。まづ東の戸をあけて見ければ、春の景色と覚えて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞のうちよりも、鶯の音も軒近く、いづれの木末も花なれや。南</p>	<p>04</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・女房は、浦島と夫婦の契を申し出る</li> <li>・浦島、女房の申し出を受諾す</li> <li>・女房、楽園の名を竜宮城と称す</li> </ul>	
--	--	--



面を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春をへだつる垣穂には、卯の花や、まづ咲きぬらん、池の蓮は露かけて、汀涼しきさざなみに、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつつ、空に鳴きぬる蟬の声、夕立過ぐる雲間より、声たて通るほととぎす、鳴きて夏とや知らせけり。西は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して、籬の内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、真萩が露を分けく、て、声ものすごき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。さて又北をながむれば、冬の景色とうち見えて、四方の木末も冬がれて、枯葉に置ける初霜や、山々やただ白妙の、雪に埋るる谷の戸に、心細くも炭竈の煙にしるき賤がわざ、冬と知ら

05

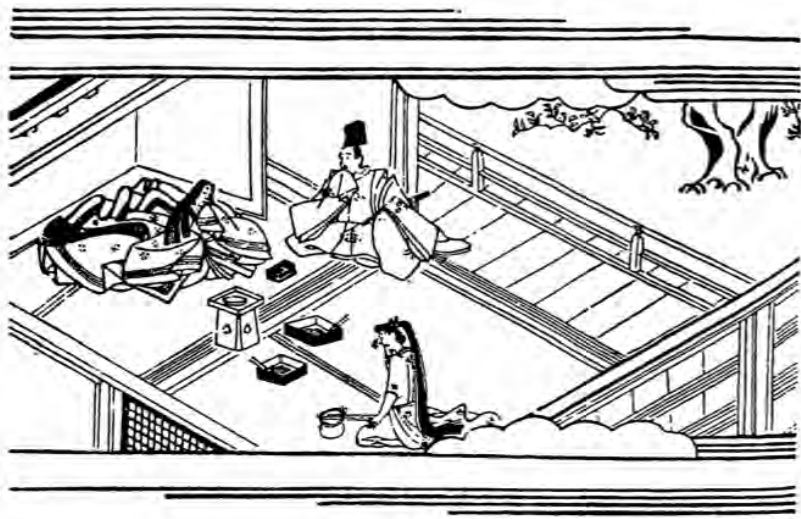
・楽園（竜宮城）は、四季折々の美に満つる

かくておもしろき事どもに、心を慰み、棠花に誇り、明し暮し、年月をふる程に、三年になるは程もなし。浦島太郎申しけるは、「われに三十日の暇をたび候へかし。故郷の父母を見すて、かりそめに出でて、三年を送り候へば、父母の御事を心もとなく候へば、あひ奉りて、心やすく参り候はん」と申しければ、女房仰せけるは、「三年が程は、鷺鷥の衾の下に比翼の契をなし、片時見えさせ給はぬさへ、とやあらん、かくやあらんと心をつくし申せしに、今別れなば、又いつの世にか逢ひ参らせ候はんや。二世の縁と申せば、たとひ此世にてこそ夢幻の契にてさふらふとも、必ず来世にては、一つ蓮の縁と生れさせおはしませ」とて、さめくと泣き給ひけり。又女房申しけるは、「今は何をか包みさふらふべき。自らは、この竜宮城の亀にて候が、ゑしまが磯にて、御身に命を助けられ参らせて候、その御恩報じ申さんとて、かく夫婦とはなり参らして候。また是は自らがかたみに御覧じ候へ」とて、左の脇よりいづくしき箱を一つ取り出し、「あひかまへてこの箱をあけさせ給ふな」とて渡しけり。会者定離のならひとて、会ふものには必ず別るるとは知りながら、

06

・浦島、竜宮城にて三年を女房と過ごす  
 ・浦島、父母を恋い、里帰りを女房に申し出る  
 ・女房は、夫婦の契りの永遠を謳い、かつ離別を悲しむ  
 ・女房、浦島の亀の救命の件につき恩を述べ、また夫婦の契りを寿ぎ、浦島に形見（＝箱）を渡す  
 ・女房、形見の箱を開くなど申す





とどめ難くてかくなん、  
 日数へて重ねし夜半の旅衣立ち別れつ  
 ついつかきて見ん  
 浦島返歌、  
 別れ行く上の空なる唐衣ちぎり深くは又  
 もきて見ん  
 さて浦島太郎は、互に名残を惜しみつつ、  
 かくて有るべきことならねば、かたみの箱を  
 取り持ちて、故郷へこそ帰りけれ。忘れもや  
 らぬ来し方、行末の事も思ひ続けて、遙か  
 の波路を帰るとて、浦島太郎かくなん、  
 かりそめに契りし人のおもかげを忘れも  
 やらぬ身をいかがせん  
 さて浦島は、故郷へ帰り見てあれば、人跡

07


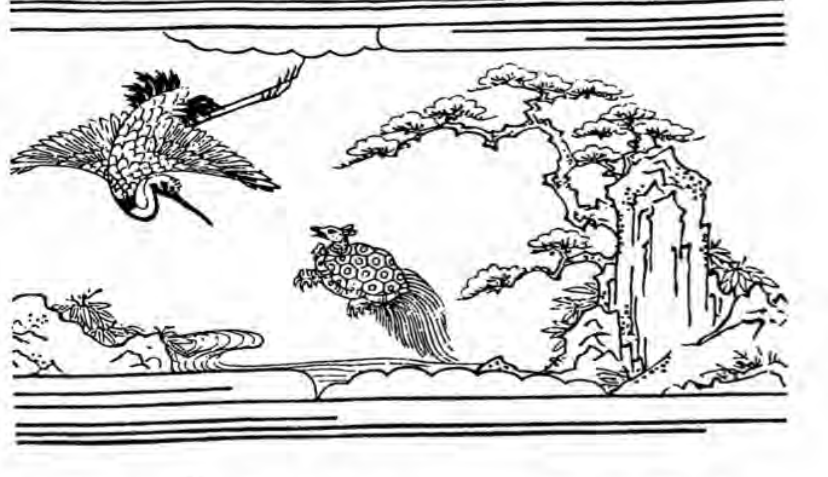
- ・女房、浦島との離別を悲しみ、かつ歌を奏す
- ・浦島、再訪を返歌に詠む
- ・浦島、帰還途中にて心境を詠む



絶えはてて、虎ふす野辺となりけり。浦島  
 これを見て、こはいかなる事やらんと思ひ、  
 ある傍を見れば、柴の庵のありけるに立ち、  
 「物いはん」といひければ、内より八十ばか  
 りの翁出であひ、「誰にてわたり候ぞ」と申  
 せば、浦島申しけるは、「此所に浦島の行方  
 は候はぬか」といひければ、翁申すやう、  
 「いかなる人にて候へば、浦島の行方をば御  
 尋ね候やらん、不思議にこそ候へ。その浦島  
 とやらんは、はや七百年以前の事と申し伝へ  
 候」と申しければ、太郎大きに驚き、こはい  
 かなる事ぞとて、そのいはれをありのままに  
 語りければ、翁も不思議の思ひをなし、涙を  
 流し申しけるは、「あれに見えて候古き塚、

08

- ・浦島、故郷に帰還するが、故郷の異変に気付く
- ・村民より、浦島太郎は七百年の月日が経つことを知らされる
- ・浦島、故郷の月日の変化を嘆く

 <p>古き石塔こそ、その人の廟所と申し伝へてこそ候へ」と指をさして教へける。太郎は泣くく、草深く露しげき野辺を分け、古き塚に参り、涙を流しかくなん、かりそめに出でにし跡を来て見れば虎ふす野辺となるぞ悲しき</p> <p>さて浦島太郎は、一本の松の木蔭に立ち寄り、呆れはててぞ居たりける。太郎思ふやう、亀が与へしかたみの箱、「あひかまへてあけさせ給ふな」といひけれども、今は何かせん、あけて見ばやと思ひ、見るこそくやしかりけれ。此箱をあけて見れば、中より紫の雲三すぢ上りけり。是を見れば、二十四五の齢も、忽ちに変りはてにける。</p>	<p>09</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>浦島太郎、村民より自分の墓所（＝塚）の在りかを教えられる</li> <li>浦島、亀がくれた形見の箱を開けることを決心し、それを実行する</li> <li>箱より煙が上る</li> <li>青年浦島、変わりはてる（ただし、容貌姿は示されず）</li> </ul>	<p>・変身</p>
 <p>扱浦島は鶴になりて、虚空に飛び上りける。そもく此浦島が年を、亀がはからひとして、箱の中に畳み入れにけり。さてこそ七百年の齢を保ちける。あけて見るなど有りしを、あけにけるこそ由なけれ。</p> <p>君にあふ夜は浦島が玉手箱あけてくやしきわが涙かな</p> <p>と歌にもよまれてこそ候へ。生有る物、いづれも情を知らぬといふことなし。いはんや人間の身として、恩をみて恩を知らぬは、木石にたとへたり。情深き夫婦は、二世の契と申すが、寔に有りがたき事どもかな。浦島は鶴になり、蓬萊の山にあひをなす。亀は甲に三せきのいわのをそなへ、万代を經しと也。扱こそめでたき様</p>	<p>10</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>浦島は鶴になり飛翔する</li> <li>箱は、亀の計らいにて「年」が畳み入れたことが示される。そのため、浦島は七百歳の年齢を授けられることが示唆される。</li> <li>箱の開封により七百年が一瞬にて経過する</li> <li>浦島、感慨を詠む</li> <li>鶴亀の謂れが話される</li> </ul>	<p>・変身</p>

<p>にも、鶴亀をこそ申し候へ。只人には情あれ、情の有る人は行末めでたき由申し伝へたり。其後浦島太郎は、丹後国に浦島の明神と顕れ、衆生済度し給へり。亀も同じ所に神とあらはれ、夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。</p>	<p>11          ・「人には情あれ、情の有る人は行末めでたき由」とあるのは、冒頭の釣り上げた亀の放生（→02.）の因果を語っていると思われる。          ・浦島、丹後国の「浦島の明神」として顕現する。          ・亀も神として顕現し、夫婦の明神となることが示され、女房（＝乙姫）が、亀であることが示される。</p>	
---	---	--

【課題】

みなさんが、これまで受講してきた「認知症コミュニケーション」への授業参加を通して学んできたさまざまなことを参考にしながら、次の課題を考えてください。もし、みなさんが「中学生にもわかるように（＝楽しんでいただける）、認知症の人びとのコミュニケーションを考える教材にこの御伽草子版『浦島太郎』を利用するとすれば、みなさんは、どのような討論課題を設定することができるでしょうか？」※

そのためには、この物語の語句を含む字義解釈、さまざまな寓意（親子の愛情、夫婦の繋がり、時間概念、勤労観、異種婚や変身譚なども含むファンタジーなど）について、自由に話し合うことが不可欠になるでしょう。

大学学部高学年、大学院生、社会人らしい豊かな経験をもとに、多いに「脱線」（宮本友介さんの言葉）しつつ、議論を展開してください。

場合によっては、前半を（脱線大歓迎の）自由討論、後半を、具体的な課題案の提示など、スケジュールを上手に管理しつつ民主的に議論をすすめることも必要になるかもしれません。

※2015年8月1日土曜日（13:30-17:30）大阪府下の中学生22名を招待して実際に開催されます。皆様にはTAとして議論等にボランティア参加していただければ幸いです——ただし授業単位とは無関係です。参加は任意ですが、参加のつもりがある方にはその意思の旨を担当教員までお伝えいただければ助かります～♪

【文献】

・『御伽草子（下）』市子貞次校注、Pp.160-170、岩波文庫、1986年